思い出のおことば

― 竹林　滋先生を偲ぶ ―

神山孝夫（大阪大学）

君の本はとても参考になる

19 の頃より先生にはずっとお世話になった。東海道の西端に奉職してから暫時連絡は疎となったが、1994 年春頃、拙い草稿をお送りしてから、また時折ご連絡をいただくようになった。どうやら辛うじてお眼鏡にかなったのか。「鋭い指摘、私も同感」とのメモや、翌年の賀状に添えられた上記のおことばがどんなに励みになったことか。

小平のお宅にあがると、某出版社に相談するよう指示をいただいた。同社での出版はかなわなかったが、草稿は翌年小さな出版社から上梓され、先生は序文をお寄せくださった。

しまった、昼も寿司だった

若くして肺を患って以来、先生のご健康は危ういものであった。教職を離れてからはその危うさが一層増し、心筋梗塞に加えて脚が衰えた。だが、趣味と食へのこだわりは衰えを見せなかった。お持ちした饅頭に舌鼓を打ちつつ野球と相撲談議をひとしきり。次いでレーザーディスクでカラヤンを堪能した後、歩く練習を兼ねて晩飯を食いに出ようとおっしゃる。多摩モノレールの車窓を楽しみつつ向かった立川駅前では蕎麦か寿司かでしばし逡巡。後者を選択して一口頬張るなり発したのが上のおことばである。

俺ほど親不孝な奴はいない

府中キャンパスまで車でお送りした折のこと。途中で蕎麦かラーメンでも食おうとしたが、なかなかいいところがみつからない。やむなく東八道路沿いのファミレスで腹をこしらえ、そこからは多磨墓地の中を突っ切って行けとおっしゃる。そこにご両親が眠っているという。次いで発されたのが上のおことばである。ご両親への思いをひしひしと感じた。

首の上はまあな

電話でお元気ですかと伺うと、最近はいつもこんなお答えが返ってきた。首の下のご健康はいよいよ危うくなり、背骨の圧迫骨折で車椅子が手放せず、酸素吸入器を常用、横になって過ごす時間も増え、訪問看護で風呂に入れてもらうのが楽しみの由。

それでも執筆意欲はなお旺盛で、恐らく最後と決めた仕事の進捗状況を息を切らしながら語り、俺の分が一区切り付いたら残りは頼むぞとおっしゃる。先生亡き今、果たしてご

期待通りに事が運ぶのかどうか。誠に心もとないが、諸兄のお力添えをいただきつつ、衰えはじめた首の上と下に残った微力を傾注することを墓前に誓う。

先生、数々のおことばをありがとうございました。どうかゆっくりとお休みください。

（2011 年，岩崎研究会ニューズレター掲載）